

自著を語る

勝又浩

ごく短い書評のようなものでも私が書く作家論ふうになる、と友人に言われたことがあった。何故そうなるのか、思い当たることの一つは、どんな作品も一冊も読めば自然にその書き手の人柄、人品のようなものも見えてしまうから、結局はそれを書くことになり、その結果なのだろうということである。

ひと頃「作者の死」——作者などいない、いるのは語り手だけだという議論が流行ったが、それは西欧語ゆえの問題、日本語では、演じられたものも含めて作者はいつでも顕在する。だから「私小説」もできたのだ。

そういうこともあって、私は作家論という形式は好きで、作家論集として括った著作も何冊かある。そうではあるのだが、一方で、いわゆ

山椒魚の忍耐

る長編作家論、一人の作家について一冊分に相当するくらい書く、という仕事はこれまでにならなかつたことがない。一つのテーマについて書いた『鐘の鳴る丘』世代とアメリカや『私小説千年史』のような仕事はあるが、一人の作家についてはこの『山椒魚の忍耐 井伏鱒二の文学』が初めての試みであった。

やってみていろいろ分かったこともあるが、その一つは、書きながら気づいた、さまざまな発見、作家への発見もあれば、それを受け入れている自分自身への発見もあった、それらを反映したり取り込んだりできたことだ。そういう意味で楽しみも多い仕事であったが、それはやはり、根本のところには井伏鱒二への信頼があったからできたことだったなど、今になって気がつく。

山椒魚の忍耐



勝又浩

井伏鱒二の文学

『山椒魚の忍耐 井伏鱒二の文学』
(水声社・2018年10月)

『鐘の鳴る丘』世代とアメリカ

廃墟・占領・戦後文学

勝又浩



2012年2月、白水社から刊行の
『鐘の鳴る丘』世代とアメリカ
廃墟・占領・戦後文学』